

日文研図書館所蔵資料紹介

古地図と絵はがきでみる 2.日本の温泉

日本には27000以上の泉源と3000を超える温泉地があります。
古来より人々は温泉を求め旅をしました。
そのため、地図・旅行案内・絵葉書が多く作られてきました。

今回は有名な3つの温泉を取り上げました。

豊臣秀吉に愛された**有馬温泉**(兵庫)。

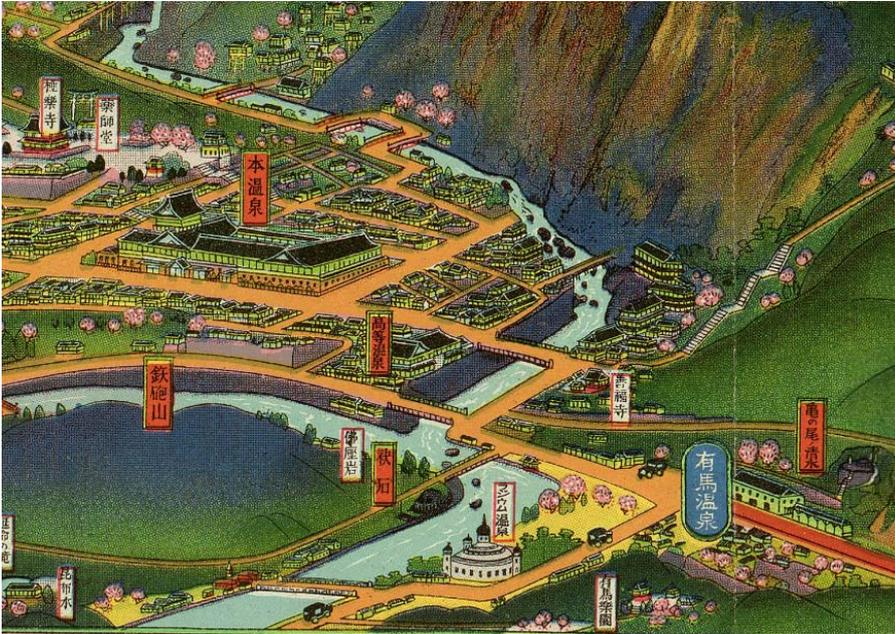
『古事記』において、軽太子の流刑先として日本の文献で初めて記された**道後温泉**(愛媛)。

家康によって幕府直轄領となり、その後も文豪や著名人に愛される**熱海温泉**(静岡)。

普段はなかなか目に触れない資料なのでぜひご覧ください。

有馬温泉(兵庫)

古くから有名で、『日本書紀』に最も早く登場する温泉です。承徳元(1097)年の大洪水、享禄元(1528)年以降の大火等でたびたび荒廃するものの、その都度再興して今に至ります。『滑稽有馬紀行』をはじめ、手引書や旅行記も数多く残されています。



リスト番号1

「神戸有馬電鐵沿線名所交通圖」(吉田初三郎作)の一部

【飛鳥時代】

『日本書紀』に最も早く登場する温泉です。

「秋九月丁巳朔乙亥、幸于津国有間温湯」

(舒明天皇3(631)年9月) ※注1

「冬十月、幸有有間温湯宮」

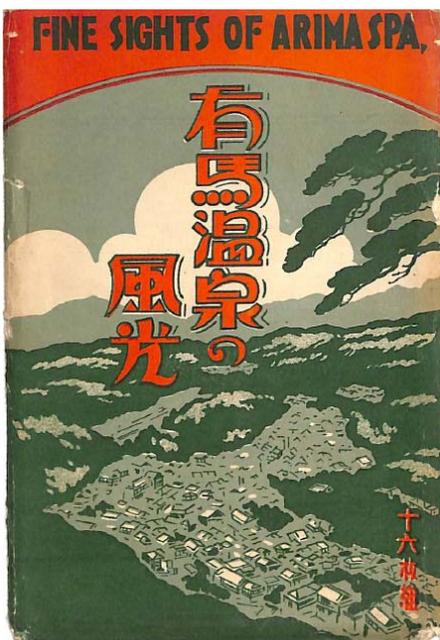
(舒明天皇10(638)年10月) ※注2

【平安・鎌倉時代】

藤原道長・頼道や藤原定家などが訪ねた記録があります。藤原定家は建仁3(1203)年以来、幾度となく有馬を訪れました。

「七日、天晴、自季夏在有馬湯屋、今朝遷坐此山上人湯屋、此處地形尤幽也、對高山望遠水、今日始水湯」

(『明月記』建仁3年7月7日) ※注3



リスト番号2

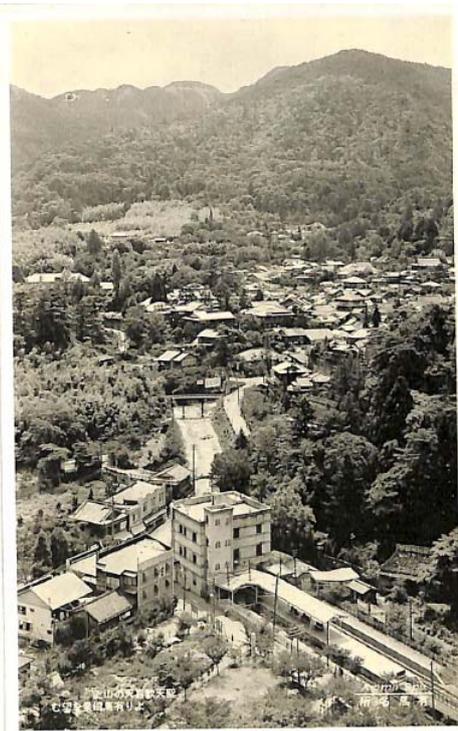
「有馬温泉の風光」袋



リスト番号3

天然炭酸泉湧出場

有馬温泉(兵庫)



リスト番号4

聖天歓喜天の山上より
有馬温泉を望む

【南北朝・室町時代】

鎌倉時代以降も僧・武家などで賑わい、豊臣秀吉にも愛されました。

滞在用に湯山御殿を作らせ、泉源と浴槽の改修工事も行いました。

【江戸時代】

庶民は近世から有間温泉に親しみました。

世話役の大湯女・小湯女がおり、文政10(1827)年刊『滑稽有馬紀行』にも記述が見えます。

【明治以後】

谷崎潤一郎が幾度も訪れ、その作品『細雪』にも有馬温泉にあった旅館「花の坊」が登場します。

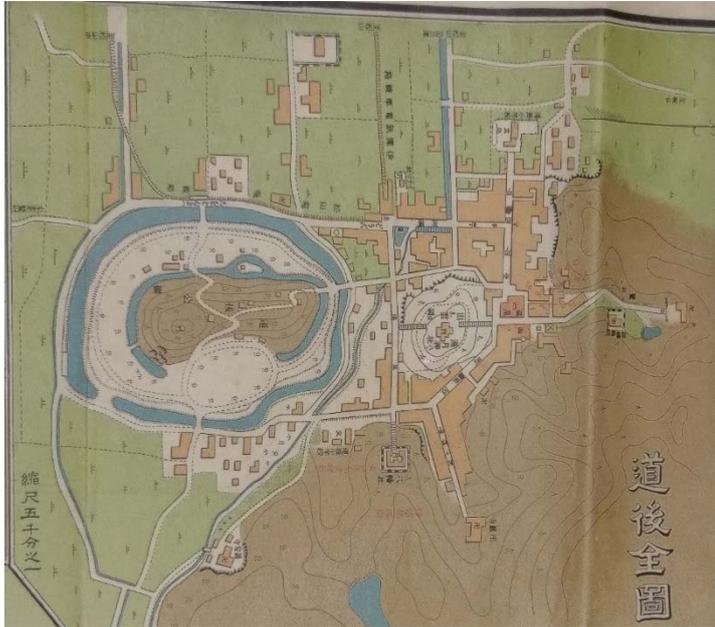


リスト番号5

ラヂウム温泉大浴場

道後温泉(愛媛)

日本の文献初登場の温泉です。古代には伊予温湯・熟田津石湯と呼ばれていました。温泉で傷を癒した白鷺を見て人々も利用するようになった、という言い伝えがあります。あらゆる文献にその名を残し、近代では夏目漱石や正岡子規も訪れました。



リスト番号5

「松山市全圖」(楠日榮吉著作)の一部

【古代】

日本の文献初登場の温泉です。古代には伊予温湯・熟田津石湯と呼ばれました。木梨之輕太子と同母妹の輕大郎女の物語で二人の最後の地として登場します。

「其輕太子者、流於伊余湯也。」

(『古事記』允恭天皇条)※注4

【平安時代】

天曆7(953年)東大寺の僧明珍が官符を申請した後、伊予の温泉に行き病を治したとあります。

「三月廿日己亥 權少僧都明珍申給官符 向伊豫國温泉治病」

(『扶桑略記』天曆7)※注5



リスト番号7

「道後土産」袋



伊予國後湯之町之全圖
The Dōgo Yunomachi Iyo

リスト番号8

伊豫道後湯之町全景

道後温泉(愛媛)



伊予道後温泉の神
Dogo Onsen Iyo
〈行啓山古軒三〉

リスト番号9

伊豫道後温泉神の湯

【平安時代】

『源氏物語』空蝉の巻と夕顔の巻に「伊予の湯桁」の語が出てきます。貴族の間では数の多いことのたとえとして使われていたようです。

「伊予の湯桁もたどたどしかるまじう見ゆ」(「空蝉」)※注6

(伊予之介に対して)「湯桁はいくつ」と問はまほしく思せど」

(「夕顔」)※注7

【江戸時代】

温泉の建物は腐食がひどいため、元禄15(1702)年に藩主松平定直によって大改築が行われました。

【明治以後】

松山赴任時代、夏目漱石は足繁く道後温泉に通っていたようです。

さらには、親友の正岡子規と連れ立って訪ねたことも。

子規は「足なへの病いゆてふ伊予の湯に飛びても行かな驚にあらませば」(『竹乃里歌』)※8という歌を残しました。

漱石の『坊っちゃん』では、「住田の温泉」の名で道後温泉が紹介されました。※注9

「此住田と云ふ所は温泉のある町で城下から汽車だと十分許り、歩行いて三十分で行かれる」

「温泉は三階の新築で・・・(中略)おれは人の居ないのを見済ましては十五畳の湯壺を泳ぎ巡つて喜んで居た」

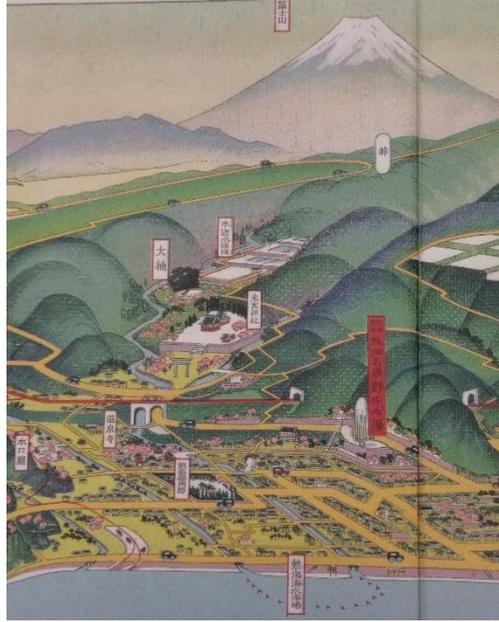
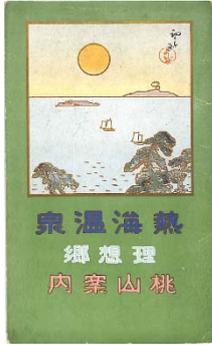


リスト番号10

道後と松山(大阪商船)

熱海温泉(静岡)

文化人や政府高官がよく訪れた温泉であり、『金色夜叉』の舞台として一躍有名になりました。古来より有名な温泉地は元から交通の便も良いところが多かったのですが、熱海はそうではありませんでした。明治から昭和にかけて鉄道が整備され、より多くの人々が利用するようになりました。



サンフランシスコやハワイも描かれています

リスト番号11

「熱海温泉理想郷桃山案内」(吉田初三郎作)の一部

【室町時代】

禅僧の義堂周信は湯治のため熱海へ赴き、熱海を詠じた詩も作りました。

中巖円月もまた詩を残しています。

連歌師・歌人・猿楽師などの文化人が訪れた記録も残っています。

【江戸時代】

徳川家康が湯治に訪れ、寛文年間には将軍御用の御汲湯が始まったといわれています。

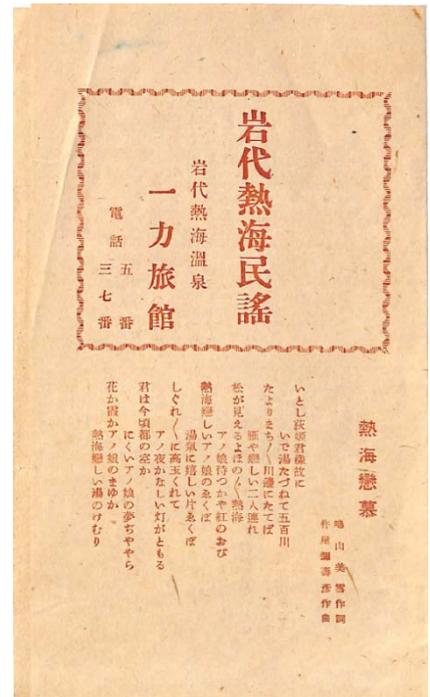
八代将軍徳川吉宗の時には9年で3600を超えるほどの湯樽が江戸城に運ばれました。

『豆州熱海之記』(元禄8(1695)年)など、湯治の手引について書かれたものも出版されました。



リスト番号12

湯煙店を突く熱海の朝
(A view morning of Atami Spa.)



リスト番号13

岩代熱海民謡(岩代熱海温泉 一力旅館)

熱海温泉(静岡)



リスト番号14

「熱海温泉名所圖繪」(吉田初三郎作)の表紙

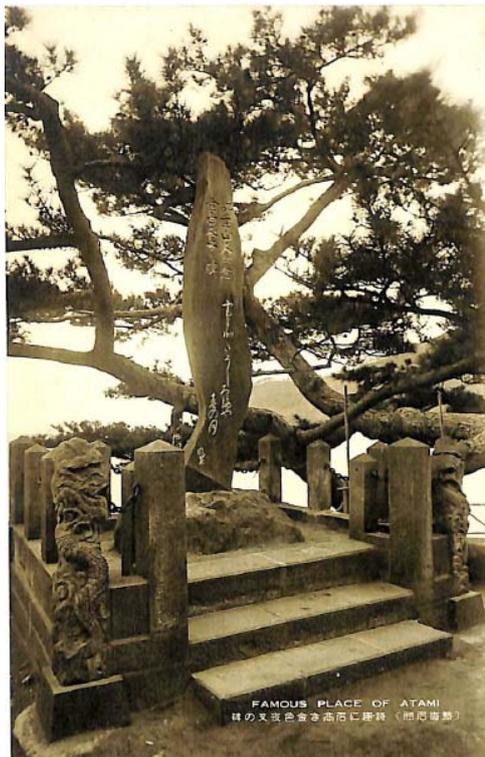
【明治以後】

明治政府高官も訪れていた熱海。明治30(1897)年、熱海を舞台とした尾崎紅葉の『金色夜叉』が発表されると熱海の名は世に知れ渡りました。

「二人はの、今朝新聞を見ると急に思着いて、熱海へ出掛けたよ。何でも昨日醫者が湯治が良いと言うて切に勧めたらしいのだ。」

(『金色夜叉』)※注10

熱海には、『金色夜叉』の碑だけでなく、貫一・お宮の像もあります



リスト番号15

熱海温泉 詩趣に盾高き金色夜叉の碑

熱海温泉(静岡)



リスト番号16

「新撰豆菰熱海温泉全圖」の一部

伊豆熱海温泉 寶石風呂 露木旅館 熱海長九番

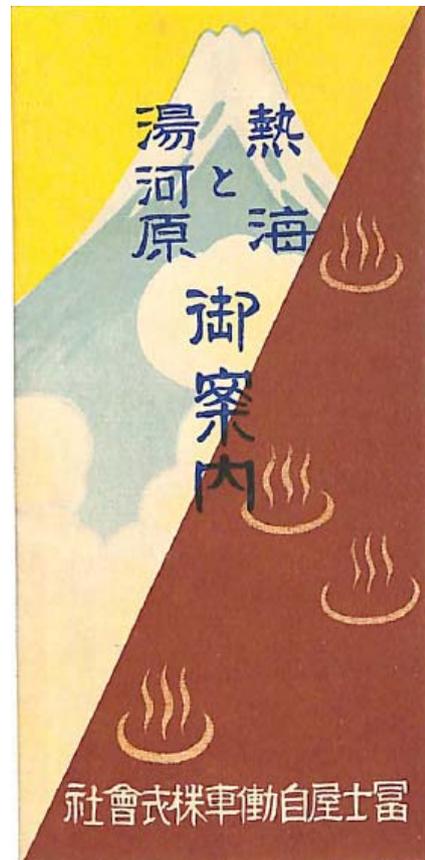
東京驛發		國府津發		熱海發		國府津發		東京驛着	
前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
七、五〇	七、四〇	七、五〇	七、四〇	七、四〇	七、三〇	七、三〇	七、二〇	七、一〇	七、〇〇
六、五〇	六、四〇	六、五〇	六、四〇	六、四〇	六、三〇	六、三〇	六、二〇	六、一〇	六、〇〇
五、五〇	五、四〇	五、五〇	五、四〇	五、四〇	五、三〇	五、三〇	五、二〇	五、一〇	五、〇〇
四、五〇	四、四〇	四、五〇	四、四〇	四、四〇	四、三〇	四、三〇	四、二〇	四、一〇	四、〇〇
三、五〇	三、四〇	三、五〇	三、四〇	三、四〇	三、三〇	三、三〇	三、二〇	三、一〇	三、〇〇
二、五〇	二、四〇	二、五〇	二、四〇	二、四〇	二、三〇	二、三〇	二、二〇	二、一〇	二、〇〇
一、五〇	一、四〇	一、五〇	一、四〇	一、四〇	一、三〇	一、三〇	一、二〇	一、一〇	一、〇〇
〇、五〇	〇、四〇	〇、五〇	〇、四〇	〇、四〇	〇、三〇	〇、三〇	〇、二〇	〇、一〇	〇、〇〇

昭和四年九月十五日改正

リスト番号17

露木旅館お願ひ 東京熱海間列車時間表

1929(昭和4)年の時刻表です。1925(大正14)年、国鉄熱海線が開通し、熱海駅が開業しました ※その前は人車鉄道でした



リスト番号18

熱海と湯河原御案内(富士屋自動車株式会社)

熱海温泉(静岡)



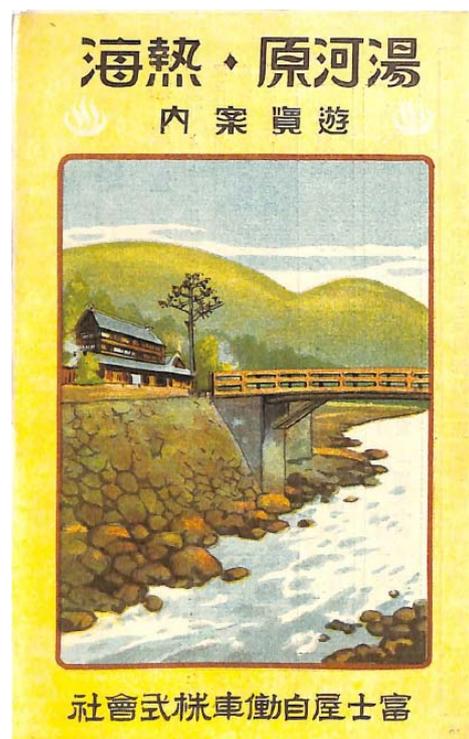
リスト番号19

熱海間歇温泉の壮観
(A grand sight of a
geyser at Atamai)



リスト番号20

熱海温泉 袋



リスト番号21

湯河原・熱海遊覧案内(富士屋自動車株式会社)

富士屋自動車株式会社

注

- 注1 『日本書紀』(日本古典文学全集) p. 42
注2 『日本書紀』(日本古典文学全集) p. 48
注3 『明月記』(国書刊行会, 1911) p. 310
注4 『古事記』(日本古典文学全集) p. 322
注5 『扶桑略記』(國史大系) p. 226
注6 『源氏物語』(日本古典文学全集) p. 121
注7 『源氏物語』(日本古典文学全集) p. 145
注8 『竹乃里歌』(和歌文学大系) p. 208(1068番)
注9 『夏目漱石集[1]』(現代日本文學全集) p. 204
注10 『金色夜叉』(日本古典文学全集) p. 140-141